

# 脚本 習作

著：福嶋 亮平

## 登場人物表

ロディ	「黄昏の紋章」を身に宿す勇者。
ドゥアグ	『剣聖』の称号を持つヴァーグ族の男性。
ソフィア	「暁の紋章」を身に宿すエルフ族の女性。

丈の短い草が生い茂る草原。金属製の軽鎧を纏った青年が真剣な表情で剣の稽古に励んでいる。

ロディ 「……はっ！ っせい！ ……おらっ！！」

ひと際大きく剣を振り抜いた瞬間、遠くに馬の嘶きと悲鳴が響き渡る。

SE： （馬の嘶きと男女の悲鳴）

ロディ 「——っ！？ これは、只事じゃなさそうだな……！」

音のする方に駆け付けるロディ。巨大な蜘蛛型の魔物に襲われる商隊の姿を目にする。

ロディ 「ハッ！ 随分と楽しそうなことになってんじゃねえか。だが、お客さん方、こちらはパーティ会場じゃありませんぜ！」

魔物の群れを相手に大立ち回りを繰り広げるロディ。だが、圧倒的な物量に次第に押され始める。

ロディ 「ちっ！ こいつら一体、何匹居やがるんだ！」

「俺はともかく、商隊の連中が、そろそろやべえな……。こんな時に限って、ソフィアの奴はいねえしよ……！」

ますます形勢は悪化。戦線が崩壊し、魔物の群れが雪崩れ込もうとした瞬間、後方の群れが大きく吹き飛ぶ。

ロディ 「！！——くそっ、新手か！？」

ひと際大きく魔物が吹き飛んだ直後、動きやすそうな金属製の軽鎧に身を包んだ壮年の男が現れる。長大な剣を肩に担ぎ、不敵に笑いながらロディに声を掛ける。

ヴァーグ族の男 「よよよ、若えの。なかなか楽しいことになってんじゃねえか。

ひとつ、オレも混ぜちゃあくんねえか？」

ロディ 「……誰だか知らんが助かる！ ——特別に“参加費”はタダにしておいてやるよ！」

ヴァーグ族の男 「へっ、そいつぁご機嫌だ！ せいぜい腹いっぱい食い散らかさせてもらおうとするぜ！！」

凄まじい勢いで魔物を蹴散らしていく二人。程なくしてすべての敵を殲滅させる。

ヴァーグ族の男 「なんでえ。思ったよか、呆気なかったな。……まあ、死人も出なかったみてえだし、めでたしめでたし、ってとこか」

ロディ 「アンタ、相当の遣い手だな。……まだまだ上には上がいる、ってことを痛感したよ」

ヴァーグ族の男 「だっはっは！ 腐るな腐るな。何、お前さんもなかなかいい筋してると思うぜ。 ——さて、楽しい“祭り”も終わったことだし、そろそろお暇させてもらおうとするかな」

あっさりその場を立ち去ろうとする壮年の偉丈夫。慌ててロディが引き止める。

ロディ 「ちょっと待ってくれ！」

ヴァーグ族の男 「おう？ まだ何か用か？」

ロディ 「アンタさえよければ、町で飯と酒でも奢らせてくれないか？  
助けてくれた礼をしたい」

ヴァーグ族の男 「おっ、魅力的なお誘いじゃねえか。——だが、オレは相当に食  
うぜ？ 破産する覚悟はあるんだろうな？」

ロディ 「はっ、望むところだ。まあ、もしそうなったら、助けた商隊の  
連中にでも泣きつくさ」

○アグリポルト町内の酒場（夕方）

酔客でごった返す店内。不快じゃない程度の喧噪の中、  
盃を酌み交わす二人。

ロディ 「俺たちの出会いと勝利に——」

ヴァーグ族の男 「——乾杯っ！！」

SE： （ジョッキグラスがぶつかり合う軽快な音）

ロディ 「そういや、お互いにまだ自己紹介もしていなかったな。——俺  
は、ロディ。劫魔節を終わらせるために、仲間と旅をしている」

ヴァーグ族の男 「だははっ！劫魔節を終わらせるたあ、大きく出たもんだ！ い  
いねえ、嫌いじゃねえぜ、そういうデケェことぬかす奴あ！」

ロディ 「……一応言っておくが、俺は本気だからな」

ヴァーグ族の男 「すまんすまん。決して、バカにしたワケじゃねえんだ。気を悪  
くさせたんなら、謝るぜ。さて、オレの番だな。オレの名は……」

一瞬だけ目を細め、言葉に詰まった様子を見せる男。

ヴァーグ族の男 「——オレの名は、『クアド』だ。見ての通り、流しの傭兵だ。  
強え奴との出会いを求めてあっちにふらふら、こっちにふらふら、  
ってなもんよ」

ロディ 「その強さなら、それも納得だ。だが、奇遇だな。俺も、以前は  
傭兵として魔軍と闘って——」

??? 「あーっ！ こんなところにいた！！ もう、ホント探し回っ  
たんだからね！！」

甲高い少女の声が、ロディの言葉を呑み込む。突然の闖  
入者に驚いた様子も見せず、後ろを振り返るロディ。

ロディ 「よお、ソフィア。首尾はどうだ？」

ソフィア 「おかげさまで、上々よ。——じゃなくって、勝手に集合場所を  
変えないで、っていつも言ってるでしょう！」

ロディ 「悪い悪い。ちょっとしたトラブルと出会いがあったもんでな」

クアド？ 「おうおう、随分と威勢のいい嬢ちゃんだな。おい、ロディ。二  
人でイチャついてばかりいねえで、紹介しちゃうねえか？」

にやにやと揶揄うような表情を浮かべるクアド。そこで  
初めてクアドの存在に気が付くソフィア。

ソフィア 「あ、私ったらすみません……！ 私は、ソフィアと言って、ロデ  
ィと一緒に旅をしています。ロディ、こちらの方は？」

ロディ 「コイツの名前は、クアド。凄腕の傭兵で、さっき草原で危ない  
ところを助けてもらったところだ」

クアド？ 「まあ、そういうこった。これも何かの縁だ。よろしく頼むぜ、  
嬢ちゃん」

ソフィア 「えっ、危ないところって……、まあいいわ。——ロディがお世話になりました。こちらこそ、よろしく願いますね、クアド、さん……？」

差し出されたクアドの手を握り返すソフィア。改めて相手の顔を確認した瞬間、驚きに目を見開いて固まる。途端に挙動不審になるソフィアを訝しむロディ。

ソフィア 「え、ウソ……?! あれ、『クアド』……?? え、でも。あれ……??」

ロディ 「おい、どうした、ソフィア。クアドがどうかしたのか？」

ソフィア 「いや、『クアド』って……! っていうかロディ、あなた仮にも元傭兵でしょう!? むしろ、何で知らないのよ?!」

ロディ 「“知らない”って、何をだ……？」

ソフィア 「だから、剣——」

クアド? 「まあまあ、落ち着けよ嬢ちゃん。『大方誰かと勘違いでもしてるんだろ? 他の種族から見たら、ヴァーク族の顔なんて皆、似たり寄ったりに見えるもんさ』」

人好きのする表情を崩さぬまま、ソフィアだけを威圧するクアド。思わず口をつぐまされてしまうソフィア。

ソフィア 「——っ!! ……確かにそう、かも」

ロディ 「ったく、いったい何だって言うんだ? すまないな、騒がしくしちまって」

ドゥアグ 「いや、賑やかな酒は嫌いじゃない。それより、もっとお前らの話を聞かせてくれねえか」

ロディ 「お安い御用さ。で、何が聞きたいんだ？」

ドゥアグ 「そうだな。まずは——」

気を取り直して話に花を咲かせるロディとドゥアグ。そんな二人を後目に、ひとり脳内で困惑を募らせるソフィア。

ソフィア (M) 「(何で『剣聖ドゥアグ』がこんな場末の酒場で、ロディと仲良くお酒なんか呑んでいるの……！？ しかも、なぜか正体を隠しているし……！！ っていうか、“嬢ちゃんって、私、あなたより年上だと思いますけどー……！！？)」

場面転換。以下、続編。